

『本草和名』データベースの構築に向けて Toward Constructing the Database of Honzowamyo

武 倩

Wu Qian

劉 冠偉

Liu Guanwei

北海道大学 文学研究科, 札幌市北区北 10 条西 7 丁目

Graduate School of Letters, Hokkaido University, N10, W7, Kita-ku, Sapporo

概要:『本草和名』(918 年)は、深根輔仁によって編纂された日本現存最古の本草書である。本書は平安時代を代表する古辞書の『和名類聚抄』に引用されていることから、国語学研究の重要資料となっているほか、その引用典籍には中国・日本の逸書を数多く含んでおり、日中典籍交流史、古医学史の分野でも重要な資料である。『本草和名』の国語学的研究をするには、日中典籍交流史、古医学史に関する知識も必要となる。それらを踏まえた研究を遂行するためにはデータベースの構築が必要とされる。本発表では『本草和名』データベースの構築に向けて、資料の特徴やデータベース化の課題について論じる。

Abstract: Honzowamyo written by Sukehito Hukane is the oldest herbal medicine book existed in Japan. It is a very important material for classical Japanese studies as it is cited by Wamyoruijusho, which is one of the representative old dictionaries in the Heian period. It is also important for studying the history of classics exchange between China and Japan and the history of ancient medical, as the book quotes many important documents from China and Japan which have been lost. An interdisciplinary knowledge is needed to study Honzowamyo from the perspective of Japanese language studies. A database is necessary for further studies. In this article, we discuss the characteristics of Honzowamyo and how to build up a database for it.

キーワード: 和名類聚抄, 本草書, マルチデバイス

Keywords: Wamyoruijusho, herbal medicine book, multi-device

1. 本草和名の概要

1.1 本草書として

「本草」とは東洋医学で薬の原料となる薬用植物のことで、広く動物・鉱物も含むが、その学問は本草学と呼ばれる。

中国において、本草書の編纂は後漢の『神農本草経』まで遡る。それを校訂・加注したのが陶洪景(六朝)の『神農本草経集注』(『集注本草』『本草集注』とも)である。さらに、この『神農本草経集注』を増補・加注したのは蘇敬(唐)の『新修本草』である。『新修本草』は 659 年に、高宗の勅命を奉じて編纂されたもので、いわゆる中国最古の勅撰本草書である。

それが奈良時代に日本に輸入され、医学生の教科書などとして重宝された。延喜年間(918 年頃)に、深根輔仁が醍醐天皇の勅命を奉じて、唐の『新修本草』

を範にとり、『本草和名』を編纂した。それが日本現存最古の本草書である。

本書は、『新修本草』をはじめとする多くの漢籍から引用している。しかも、その多くはすでに散逸したので、文献の再建においての価値が高い。また、単なる漢籍の抄録に留まらず、薬物の漢名に万葉仮名和訓や日本での産出状況も注記しており、平安時代の語彙・文化・物産などを知る貴重な資料として知られる。さらに、後に日本で編纂された分類体漢和辞書の『和名類聚抄』(934 頃)や医学全書の『医心方』(984 年頃)等に相当な影響を与えており、辞書や医書の編纂史の研究にも貢献できる。

日本の本草学は、江戸時代には博物学の研究に発展し、明治時代以降は植物学・生薬学に受け継がれる。

1.2 諸本

本書が現代に伝わるまでの道のりは順調ではなかった。江戸幕府の医師多紀元簡によって紅葉山文庫で発見されるまで、長く所在を失っていたのである。元簡は本書を校訂し、頭註を加え、序文と提要を附し、寛政八年に版行したことによって世に広めた。しかし、元となる紅葉山文庫の古写本は明治以降再び所在不明となった。

『日本古典全集』所収の、森立之父子が書き入れをした寛政八年版本は入手しやすいため、研究材料として多用されてきた。武(2013)、(2016)は、従来国語学の分野では知られていなかった「万延元年影写本」と「松本書屋本」を紹介した。研究の底本を専ら『日本古典全集』所収の複製本に頼る状況を変えた。

「万延元年影写本」江戸時代に紅葉山文庫で発見された古鈔本を影写したもので、現在台北故宫博物院と無窮会専門図書館神習文庫に所蔵されている。「松本書屋本」(『松本書屋貴書叢刊』所収)は森立之父子らが書き入れをした版本のオールカラー影印版である[12]。

『本草和名』データベースの構築に際し、「松本書屋本」版本と、無窮会専門図書館神習文庫所蔵の「万延元年影写本」を底本にする。

1.3 体裁及び版本の考注

本書は、唐の『新修本草』の編次に従って、千種以上の薬物を収録している。体裁は、漢名を見出し語に、下に異名、和訓、産地などを記す。薬の効能・配伍・採取時節などは省かされており、漢籍本草書や医書を読むための手引きとしての性格を併せ持つといえる。

版本には、本文内容に加えて、多紀元簡や森立之父子ら江戸後期・明治の考証学者による校訂も見受けられる。その校訂に版本と古鈔本との相違に関連するものがある。

例えば、「雲母」條(図2)では、「一名地涿」の「涿」字に対して、多紀元簡は上欄で「按涿原本缺今据証類校補」という頭註を加えている。ここの「原本」は古鈔本のことで、古鈔本において「涿」という字が欠けており、元簡は版元を作る際に、『証類本草』によってそれを補ったという。古鈔本を影写した「万延元年影写本」(図1)を見ると、「涿」が空白となっていることが確認できる。

前掲の例では、「原本」脱字を示しているが、その他に、両本の間で衍字、異体字などの相違を示すものもある。今回のデータベースに反映させるのは脱字と衍字に止まり、異体字を今後の課題としたい。

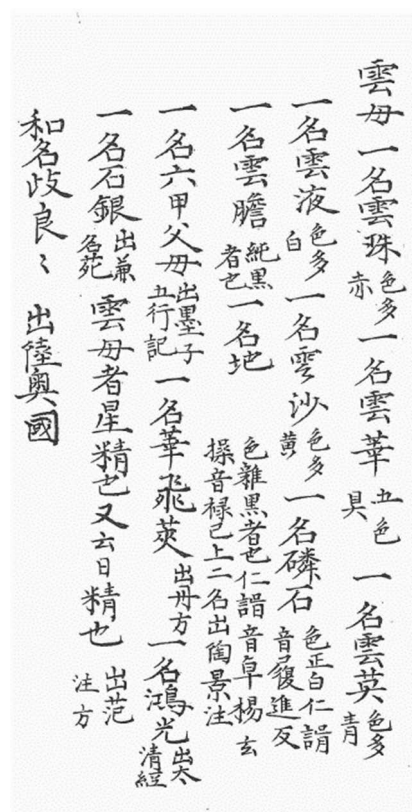


図1 無窮会蔵万延元年影写本

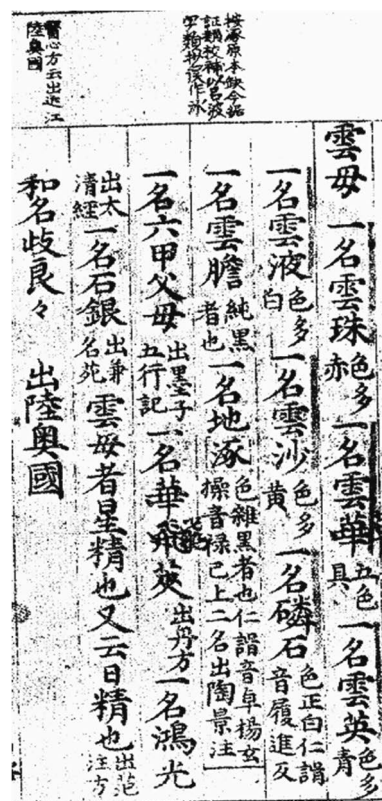


図2 日本古典全集所収版本

1.4 和名

『本草和名』の和名は万葉仮名で記されている。本書に使用される万葉仮名を表 1 にまとめる。

表 1 『本草和名』万葉仮名字母

ア	イ	ウ	エ ₁	オ
阿	以 伊	宇	衣	於
カ	キ	ク	ケ	コ
加 迦	岐 支 木	久	介	古 己
サ	シ	ス	セ	ソ
佐	之	須	世	曾
タ	チ	ツ	テ	ト
多 太	知	都	天	止
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
奈	尔	奴	祢	乃
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
波 巴	比	布	倍	保
マ	ミ	ム	メ	モ
末 万	美 三	无 牟	女	毛
ヤ		ユ	エ ₂	ヨ
也		由	衣 江	与
ラ	リ	ル	レ	ロ
良	利	留	礼	呂
ワ	ヰ		エ	ヲ
和	為 委		恵	乎

データベースで仮名検索できるように、データ入力の際に、万葉仮名を平仮名に直して情報として付け加える。

2. データベース構築の目的

2.1 和名の漢字表記についての研究

『本草和名』は 1034 種の薬物を収録しており、その中の 594 種に和名が付されている。体裁の紹介で述

べたように、本書は漢籍本草書や医書を読むための手引きとして用いられていたと考えられる。薬の効能・配伍・採取時節などを示すよりは、薬の同定に重点を置き、可能な限り多くの異名を列挙する傾向がある。例えば、「雲母」の例では、「雲珠」「雲華」「雲英」「雲液」「雲沙」「磷石」「雲膽」「地涿」「六甲父母」「華飛莢」「鴻光」「石銀」「星精」「日精」の 14 個の異名も挙げている。

また、一つの見出し漢名に一つの和名しか付されているとは限らず、二つの和名を持つのは 95 項目で、三つの和名を持つのは 8 項目である。

さらに、項目間の関係を見ると、例 1 のように、同じ漢名が複数の項目に出現する場合がある。

例 1:「雲母」

雲母 一名雲珠【色多赤】…和名岐良々 出陸奥国（上三 03 オ 3）¹

落石 【蘇敬注云苞絡石木而生故以名耳】…一名雲母一名雲華一名雲珠一名雲英【已上五名出積薬性】…和名都多（上七 20 表 6）

雲實 一名員實一名雲英一名天豆【蘇敬注黄黒似豆故以名之】一名雲母【苗名也出蘇敬注】和名波末佐々介（上七 23 オ 4）

これとは別に例 2～5 のように、同一和名が複数の項目に出現する場合（次に示す）もある。

• 二項目に出現：計 35 語

例 2:「乎止乎止之」

赤箭 【蘇敬云遠看如箭】一名離母一名鬼督郵【仁譚音尤】一名神草一名獨揺一名當苦一…和名乎止乎止之一名加美乃也（上六 11 ウ 9）

鬼督郵 一名獨揺草一名餘毒草【出范注方】一名悶狗【出積薬又積薬性悶作悶字】和名乎止乎止之（上七 25 ウ 1）

例 3:「於毛多加」

澤藹 【仁譚音昔楊玄操音私也反】一名水寫【一名及寫】一名芒芋一名箭寫…和名奈末為一名於毛多加（上六 14 オ 6）

鳥芋 一名籍姑…一名茨菰【澤淳之類也已上出蘇敬注】鳥苳【出崔禹】…和名於毛多加一名久呂久和為（下十七 31 ウ 1）

（後略）

¹「上三 03 オ 3」は『本草和名』版本の「上冊第三卷 3 丁表 3 行目」を表す。「【】」で括る部分は小字双行です。以下同じ。

- 三項目に出現：計 2 語

例 4：「阿末奈」

黄精 一名重楼【楊玄操音直竜反】…一名飛英

【花名】一名流精【根名】一名馬箭…和名

阿末奈一名也末恵美（上六 13 オ 4）

麻黄 一名龍沙一名卑相一名卑塩一名狗骨【出

釈薬性】和名加都祢久佐一名阿末奈（上八

26 ウ 8）

白薇 一名白幕一名薇草一名春草一名骨美一名

白蜜曹【出釈薬性】…和名美奈之古久佐一

名久呂女久佐一名阿末奈（上八 30 ウ 9）

例 5：「以奴衣」

蘇 野蘇【不香似荏苒者】一名桂荏一名卿【已上

二名出兼名苑】和名以奴衣一名乃良衣（下

十八 37 ウ 7）

假蘇 …一名薑芥一名荊芥【蘇敬注云薑者荊声

訛也是菜中荊芥是也】和名乃々衣一名以奴

衣（下十八 38 オ 3）

香薷 【楊玄操音而由反】一名胡薷【本名胡薷

勒諱胡故名香薷出兼名苑】…和名以奴衣一

名以奴阿良々岐（下十八 38 オ 6）

このように、『本草和名』においては、「見出し漢名⇔異名⇔和名」の対応関係が複雑な様相を呈している。国語学の観点からは、本書が専門用語を集めた辞書一葉名辞書として位置づけられる。

本書における和名の漢字表記を詳しく考察するためには、『本草和名』データベースの構築が必要である。

2.2 辞書史の研究

古辞書の研究においては、『本草和名』は、『和名類聚抄』の序文にも名を載せられ、『和名類聚抄』の重要な出典の一つであると知られている。

つとに、『本草和名』を国語資料としての全貌を描いた築島(1965)の研究がある。その後、『本草和名』と『和名類聚抄』との引用関係については、河野(1983)、河野(1988)、宮澤(1997)、宮澤(2010)の研究が出た。『医心方』と『本草和名』『和名類聚抄』の関係については、松本(1980)、築島(1987)、加藤(2005)、松本(2007)の考察がなされた。

また、観智院本『類聚名義抄』との引用関係について調査した研究に河野(1992)、図書寮本『類聚名義抄』との関連に調べた研究に呉(2000)が挙げられる。

今後、『本草和名』データベースとその他の古辞書データベースとの連携によって、前述の先行研究をさらに進展させることを願っている。

3. データベース構築とインターフェースの開発

3.1 入力方針

前述のように、底本には「松本書屋本」版本と、無窮会専門図書館神習文庫所蔵の「万延年影写本」を用いる。実際のデータ入力には、版本をベースとして、影写本と相違のある箇所をマークアップし、注を附する。データを入力するソフトウェアには Excel を使用する。データベースの範囲は掲出項目、本文、および元簡による頭注のみで、序文などは含まない。

現在の進捗状況は、上冊の入力が終わっており、下冊の入力が半分ほど進んでいる。以下で行われるデータの分析は、上冊のみに止まり、下冊の入力が終了次第、稿を改めて報告したい。

本書にある文字はユニコードによる符号化を行い、符号化が難しい漢字は「」で括って、漢字構成記述文字列(IDS)で記入する。結果として、表 2 の示すように、上冊においては、ほぼ全ての見出しは符号化ができています。本文も表 3 の示すように、拡張漢字 B(Ext. B)まで 99%(延べ)符号化でき、IDS を利用すれば全ての本文を入力することができる。

本文にある割注は「【】」で、「一名」の後ろにある別名は「」で、松本本の上欄にある頭注に対応する漢字は「〈〉」で括る。

表 2 見出し符号化率

ブロック	延べ数	異なり数
CJK	934(98.6%)	497(97.3%)
Ext. A	8(0.8%)	6(1.2%)
Ext. B	5(0.5%)	5(1.0%)
総計	943(99.7%)	508(99.4%)

表 3 本文の符号化率

ブロック	延べ数	異なり数
CJK	18,714(98.9%)	1,627(92.1%)
Ext. A	16(0.1%)	10(0.6%)
Ext. B	32(0.2%)	23(1.3%)
踊り字	45(0.2%)	1(0.1%)
総計	18,807(99.4%)	1,661(94.0%)

3.2 フィールドの構成

本データベースは一つのテーブルからなる。テーブルは id、book、vol、page、line、entry、def、diff-type、

diff-def、japanese-name、japanese-reading の 11 個のフィールドで構成した。図 1 として示した「雲母」を例にして、各フィールドの内容と例文は表 4 に示す。

その中、japanese-reading フィールドは前述の 1.4 節に従って現代仮名遣で翻刻したものである。両本相違の diff-type と頭注の「diff-def」は本文の def にある「〈〉」で括られたものに対応する。「〈〉」で括られたものが複数ある場合、「;」で区切り、出現順に入力する。

表 4 本草和名データベースのフィールド構成

フィールド	内容	例
id	出現順 ID	HW0010
book	冊	上
vol	巻	三
page	掲出頁	03表
line	掲出行	3
entry	見出し	雲母
def	本文	一名「雲珠」【色多赤】 一名「雲華」【五色具】 一名「雲英」【色多青】 一名「雲液」【色多白】 一名「雲沙」【色多黄】 一名「磷石」【色正白 仁謂音履進及】一名 「雲膽」【純黒者也】一名 「地〈涿〉」【色雑黒者也仁謂卓楊玄操音 禄已上二名出陶景注】一名「六甲父母」 【出墨子五行記】一名 「華飛莢」【出丹方】一名 「鴻光」【出太清經】 一名「石銀」【出兼名苑】雲母者「星精」也 又云「日精」也【出範注方】和名歧良々出 陸奥国
diff-type	両本相違	空字
diff-def	頭注	按涿原本缺今据証類校補
japanese-name	和名	歧良々
japanese-reading	現代仮名遣による読み	きらら

3.3 インターフェースの実装

本データベースのインターフェースは図 3 の左の検索欄と右の結果欄からなる。

検索欄では利用度の高い「見出し」、「本文」、「和名（ひらがな）」の三つの条件で検索できる。検索した結果は右に表示される。結果の見出しは大きいサイズの文字、和名と本文は小さいサイズの文字で表示される。図 3 は和訓を「あ」という条件で検索した画面である。

インターフェースはマルチデバイス対応済みであり、PC 以外の端末でも利用しやすいレイアウトにしている。図 4 はスマートフォンでの利用画面である。



図 3 インターフェースの検索画面



図 4 スマートフォンでの利用画面

これまで、古辞書データベースの検索インタフェースのマルチデバイス対応に関しては、池田(2014)が推進する平安時代漢字字書総合データベース(HDIC)に対応させた HDIC Viewer の開発を手始めに、夢梅本『倭玉篇』全文データベース検索システムの試作も行なっている[7][16][17]。今回の『本草和名』データベースの開発では、それらとベースとなるシステムは同一として、特にインターフェースの改善に力を注いだ。

4. 付記

本研究は武田科学振興財団「杏雨書屋研究奨励」の支援のもとで実施されている。

平素は、池田証壽先生から、丁寧かつ熱心なご指導を頂いており、ここに感謝の意を表します。

また、資料を提供して頂いた無窮会専門図書館の関係各位に感謝を申し上げる。

参考文献

- [1] 池田証壽, 平安時代漢字字書総合データベースの構築, 北海道大学文学研究科紀要, 2014, vol. 142, p. 79-90.
- [2] 呉美寧, 図書寮本類聚名義抄所収の植物一和名類聚抄・本草和名との関連を中心に, 古辞書と J I S 漢字, 2000, vol.3, p. 29-38.
- [3] 加藤大鶴, 『医心方』字音注記出典と加点方針についての一考察: 『本草和名』『和名類聚抄』との比較を通じて, 論集, 2005, vol. 1, p.145-165.
- [4] 河野敏宏, 『和名類聚抄』と『輔仁本草』の関係について: 『和名類聚抄』漢文本文に関して, 岡大文学論稿, 1983, vol. 11, p.16-26.
- [5] 河野敏宏, 『和名類聚抄』の音注の文献的性格: 『本草和名』の音注との比較による, 愛知学院大学論叢(一般教育研究), 1988, vol.35(3・4), p.49-74.
- [6] 河野敏宏, 観智院本『類聚名義抄』所引の『本草和名』について, 日本語論究, 1992, vol. 2, p.69-85.
- [7] 高橋大希, 劉冠偉, 池田証壽, 夢梅本『倭玉篇』全文テキストデータベースの構築, 言語資源活用ワークショップ 2016 発表論文集, 2016, p.49-56.
- [8] 築島裕, 本草和名の和訓について, 国語学研究, 1965, vol. 5, p.1-10.
- [9] 築島裕, 『本草和名』の和訓と『医心方』の万葉仮名和訓, 国書逸文研究, 1987, vol. 20, p.3-12.
- [10] 武倩, 『本草和名』の諸本に関する一考察—万延元年影写本と全集本との関係を中心に—, 訓点語と訓点資料, 2013, vol. 131, p.43-52.
- [11] 武倩, 松本書屋本『本草和名』について, 北海道大学大学院文学研究科研究論集, 2016, vol. 15, p.51-60.
- [12] 松本一男, 松本書屋貴書叢刊, 第 1 巻, 谷口書店, 1993
- [13] 松本光隆, 書陵部蔵医心方・成簣堂文庫蔵医心

- 方における付訓の基盤: 和名類聚抄・本草和名との比較を通して, 鎌倉時代語研究, 1980, vol. 3, p.133-154.
- [14] 松本光隆, 第五節 医心方天養二年点における付訓の基盤—和名類聚抄・本草和名との比較を通して—, 平安鎌倉時代漢文訓読語史料論, 汲古書院, 2007.
- [15] 宮澤俊雅, 倭名類聚抄諸本の出典について, 北海道大学文学部紀要, 1997, vol.45, no. 2, p.1-29.
- [16] 宮澤俊雅, 倭名類聚抄と漢語抄類, 倭名類聚抄諸本の研究, 勉誠出版, 2010.
- [17] 劉冠偉, 李媛, 池田証壽, 平安時代漢字字書総合データベースの拡張と和訓対応, 研究報告人文科学とコンピュータ, 2015 vol. 2015-CH-106, no. 4, p. 1-8.
- [18] 劉冠偉, 李媛, 池田証壽, 多漢字文献の検索効率向上とマルチデバイス対応の試み, 研究報告人文科学とコンピュータ, 2017, vol.2017-CH-114, no. 6, p. 1-4.